

2019年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	後藤 永子
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋女子大学大学院修士課程生活学研究科修了、 同大学院博士課程単位取得満期退学	修士 (生活学)	保育（障害児保育）

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

養成校の教員にとって優れた保育者や教育者を社会に送り出すことは、責務である。保育者や教育者は、育ちゆく子どもの成長・発達を願うことが最大の目標である。まさに「人として育てる」ことと言える。これはまさに建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」そのものである。校訓の「真面目」でなければ保護者の信頼は得られないし、保護者は自分の子どもの命を託すことはない。社会で活躍できる保育者や教育者を養成することを目標とすることに揺らぐことはない。職位を鑑み、学生の養成に力を尽すと共に、教員の教育環境も整えていきたい。

(計画)

保育実習の担当者として、子どもの育ちの援助者になるための学び、人の手本になるべく生き方も教えていく。「人」として、教育以前の約束を守ること、人としての常識、躰についても教える。特別支援保育のなかでは、障害児・健常児が「共に生きる」社会のあり方の大切さを保育者が理解・体得できる人材を育てていく。更に、学生と教員の教育環境を整えていく。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

特別支援保育、保育実習事前指導 I Aa、保育実習事前指導 I Ab、
幼児理解の理論と方法(2クラス)

(後期)

保育内容総論(2クラス)、保育実習指導 I Aa、保育実習指導 I Ab、保育実習Ⅱ事前事後指導、
教育・保育相談、保育実践演習、保育実習 I A、保育実習Ⅱ

○教育方法の実践

保育実践演習において、現場でのコミュニケーション能力を高めるための試みとして、主体となって話す機会をより多く作り、現場保育士となる自覚を導いた。

○作成した教科書・教材

2019年3月に出版した「子ども理解—かかわりを通して—」は、「幼児理解の理論と方法」のための教科書とするための書籍です。今までの経験から多くの事例と、子ども理解の道すじと対応をまとめました。

○自己評価

教育活動と授業に関しては、十分に成し遂げられたと感じています。公務員保育士特講は、3年後期から4年前期が学生との関わりとなります。後期より講師を充実させ、講師の対応や、学生の自治体別対応をしてきました。4月より委員会体制が替わり、より細やかな学生対応が出来ることを願っています。

II 研究活動

○研究課題

- ・ 教育的研究として保育実践演習のための教材研究
- ・ 病跡学の研究

○目標・計画

(目標)

- ・ 保育実践演習の担当者として、保育士が現場で活用できる新しい教材の研究をする。子どもたちに、より豊かな園生活へと繋げる。
- ・ 初心に戻り、芸術家の病跡学研究を進める。

(計画)

- ・ 子どもの健やかな育ちに繋がる教材を素材から探し、環境構成やお話しの教材として学生たちに教示していきたい。
- ・ 芸術家の病跡学の研究のため、書籍・画集を集め、「絵画のなかの証言者」(仮)のテーマで進めていきます。

○2012年4月から2020年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・ 後藤永子『子ども理解ーかかわりを通してー』、三恵社、2019年3月、99頁
- ・ 後藤永子『障害児保育-共に生きる保育者のために-』、相川書房、2012年12月、115頁

(学術論文)

- ・ 田辺恭子・後藤永子「保育所保育指針・幼稚園教育要領から読み取る『領域』と学生が認識する領域の研究ーファシリテーションを用いてー」東邦学誌 第46巻 第2号、2017年12月
- ・ 田辺恭子・後藤永子「保育養成校学生の保育実習に対する不安の解明」東邦学誌 第45巻 第2号、2016年12月
- ・ 鹿渡よしみ・後藤永子「人として育つ、保育者の質を考える」東邦学誌 第42巻 第2号、2012年12月

(学会発表)

- ・ 後藤永子、八木朋子「年齢からみる保育所における障がい児受け入れ」第66回日本保育学会、2012年5月

(特許)

なし

(その他)

なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

なし

○所属学会

日本保育学会、日本病跡学会、日本発達障害学会、日本特殊教育学会、日本小児精神神経学会

○自己評価

学務を進める上で、行事等が土日に入り、臨床発達心理士・学校心理士の研修や学会参加が全く出来なかった。次年度こそ、研究活動が出来ると期待している。教材研究から環境構成に繋ぐ新しいパネルシアターを提案した。芸術家の病跡学研究は、書籍の資料収集をすることで終わっている。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

教育学部長としての役割を果たすと共に大学運営に貢献していく。与えられた任務を「真面目」に果たす。大学運営のスムーズな運びに全力を尽くします。

(計画)

学部長、教育学部執行部として、学部の運営、学生の教育に積極的に関わり、学生の満足度を上げていく。学科会議・学部FDでは、学部教員が充実した教育活動ができること、学生が自分を生かしつつ充実した学生生活が過ごせるように支援を考え進める。学長会議・教学法人協議会の一員として、大学・学園の運営に責任を持っていく。運営委員会の一員として、責任と自覚を持って役割を果たす。この他の委員会においても積極的に活動に関わる。決断する場面が多々あり、急な会議、打ち合わせも多く、何度も同じ確認が必要となる事案が多い。学部内での連携が図れるように具体案を出していく。

○学内委員等

教学法人協議会構成員、高大連携会議構成員、大学再編準備室会議構成員、運営委員会委員、学長会議構成員、教育力向上委員会委員、人事委員会委員、学生募集戦略委員会委員、全学教職課程委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

会議が多く、突然の時間変更もあり、保育園からの依頼や指導の時間が取れなかったことが残念に思う。また、学部内で学生問題が今も続いている状態で、学部教員の報告・連絡・相談が十分に果たされなかったこと、教員の力量に差のあることが一層露呈し、今後の課題として残った。

公務員保育士特講の自治体別個別指導をしてきた。特講講師の対応よりも、学生一人ひとりの自治体別個別指導の重要性を理解して頂き、より良い学生の指導ができる体制を切に願っている。教職支援センターで構築して頂きたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

保育養成校の教員として現職保育士の研修を行いたいが、学務に追われ、難しくなっている。現職保育士の研修は、時間を作り続けて行きたい。

(計画)

保育園から依頼を受けた、障がい疑われる子どもの指導など、時間を作り続けて行きたい。

○学会活動等

臨床発達心理士・学校心理士の研修や学会参加も、土日の大学行事等で出来なかった。

○地域連携・社会貢献等

保育園から依頼を受けた障がい疑われる子どもの指導の対応できなかったことが残念でした。

○自己評価

障がい児とその母親と関わることは、時間を取り、対応が大切です。殆ど、十分な対応ができないもどかしさの中で関わりを持ちました。臨床発達心理士・学校心理士の研修や学会に参加し学びを深め、じっくり関わり対応していきたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

次年度こそ、学校心理士・臨床発達心理士の資格を生かし、子どもの育ちのために貢献していきたい。

VI 総括

慌ただししい2年間を終え、教育活動は、十分に成し遂げられたと感じていますが、臨床発達心理士・学校心理士の研修や学会参加が全く出来なかった。公務員保育士特講は、3年後期から後藤が学生対応をしてきました。4年前期は、自治体別個別指導に入り、細やかな学生対応が必要です。次年度の4月からの教員担当が、決まっていないことに懸念を感じています。

次年度こそ、研究活動が出来ると期待している。今年度は、障がい児とその母親に対して、十分な対応のできないもどかしさの中で関わりを持ちました。次年度は、研修や学会に参加し、学びを深め、じっくり関わり対応していきたい。

以 上